

Ernest Hemingway における Old Heroes

宮 田 満 雄

Hemingway の描く人間像を支えている Hero 達を検討するについて、Philip Young が 'The Hero and the code' として論じている如く、¹⁾ 二つのタイプに分類しこれを考察するという方法論は、すでに広く認められているところである。すなわち、最初の短編集に現われた Nick Adams から、長編における Jake Barnes, Frederick Henry, Robert Jordan, Richard Cantwell 等々と、名前こそ変わるが一貫した 'Nick-Adams-hero' として考えられるものと、'The Unde-feated' における Manuel, 'In Another Country' における Major, 或いはまた、Anselmo や Santiago 等に代表される 'code-hero' とである。Earl Rovit は、これらの Hemingway hero を考察するにあたり、Young とは別の表現でこれを 'Tyros' と 'Tutors' とに分けて論じている。²⁾ これは、Nick-Adams-hero と code-hero の間には、基本的に教育的な関係が成立していると考えられるからである。つまり、一方は様々な不条理や矛盾をかかえているこの人生を、如何に生くべきかと苦悩し模索している 未成熟な者であり、他方は、これに対して一種の規範、つまり 'code' を示す後見的役柄を与えられている者だからである。そして、後者にはしばしばより素朴な人物が起用されている。これを更に平易に、大まかに分類するならば、未経験な若者と、年輪を重ねた老人とすることにもなるであろう。われわれ読者は Nick や、Jake, Henry 等の間にまじって顔を出す老人達が、Hemingway の作品の中で重要な役割を占めていることに気がつくのである。この小論においては、特に彼の作品における老人達に光をあてて考察をすすめてみたい。

I

Hemingway の作品に目を通すと、人生の荒波にもまれ、運命の巨大な力に圧倒されながら、必死にその生き方を模索している若い主人公達にまじって、我々の脳裏に焼きついて離れない幾人かの老人の姿が目につく。その一人は、1933年に出版された *Winner Take Nothing* の中に収録されている 'A Clean, Well-Lighted Place' に登場する名もない老人である。この老人は、80才位だと思われる人で、夜の暗闇とは対照的に明るいカフェのテラスの一隅にボツンと坐っている。この老人にも、若さに満ちた華やかな時代があったに違いないが、今はその面影もなく一人で静かにブランデーを傾けている。老人は、かつて自殺を試みたが果せず、人生の残りの道程を黙々と歩んでいる。看板になり若い給仕から追いたてられるようにしてようやく彼は席を立つ。老人はおぼつかない足どりで、ゆっくり歩いて行く。しかしながら、この老人は決して薄ぎたない老いぼれとして描かれているのではない。給仕の一人の言葉を借りれば、この老人は清潔であり、('This old man is clean.') ³⁾ その歩いて行く後姿には威厳さえ感じられる。

The waiter watched him go down the street, a very old man walking unsteadily but with dignity.⁴⁾

この老人とは対照的に、給仕達には孤独を粉らす家族があり、若さがあり、自信がある。けれども、清潔と威厳は彼等のものではなく、むしろ、風雪に耐えぬいて生きてきた孤独な老人のものである。

1) Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration*, Pennsylvania State U. Press, Univ. Park and London, 1966, Chapter 2.

2) Earl Rovit, *Ernest Hemingway*, Twayne, New York, 1963, Chapter 3.

3) *The First Forty-Nine Stories*, Jonathan Cape, London, 1954, p. 353.

4) *Idid.*, p. 353.

1938年4月、スペイン内乱の渦中にあった Hemingway が、バルセロナから電報原稿として送り、Ken 誌の5月12月号に発表された短編 'Old man at the Bridge' における老人も、Hemingway の作品における忘れ得ぬ老人の一人であろう。この老人は76才だと言い、鉄ぶちの眼鏡をかけ、埃にまみれた服を着て道ばたに腰をおろしていた。彼は戦火に追われ、長年住み慣れた土地を離れようやく橋のたもとまで辿り着いたものの、極度の疲労のため動けなくなり坐りこんでしまっていたのである。彼は最後まで土地に踏み留まって家畜の世話をしていたのであった。作品は非常に短いもので、この老人と、「私」と呼ばれるナレーターとの会話が主要な部分となっている。「私」は、偵察の任務をおびた兵士であるがこの老人に対しては為すすべもなく、手のつけようがなかった。

Joseph DeFalco は、スペイン内乱の断面を生き生きと印象的に描き出しているこの短編のもつ象徴的な意味を、Christian symbolism の面から論じ、Loyalist である「私」が反キリストを代表し、老人がキリストの象徴であるとし、更に、戦火の町に残された家畜、特に二匹の山羊に十字架の贖いの意味を見ようとしている。⁵⁾ ここにも先の 'A Clean, Well-Lighted Place' における老人と同様、Hemingway は、この疲れ果て埃にまみれた老人に、より高い意味づけを与えようとしていることが読みとれる。

Men Without Women に収録されている 'The Undefeated' の Manuel も、先の二つの短編の老人に比べればやや若い存在ではあるが、すでに盛りを過ぎた闘牛士であり、人生の盛りを過ぎたと言う点において、先の老人達と同一のカテゴリーに入れて考えることができる Hemingway はこの Manuel を、敗れざる男として描いているのである。彼は、闘牛に傷ついて入院していた病院を退院した後、すぐに次の試合に出場する交渉を始め、屈辱的な経過を通じて遂に夜間興行に出場する機会を得る。彼は、烈しい牛との闘いの結

果、文字通り血みどろになって牛を倒しはしたが自分自身もまた致命的な傷を負うところとなる。命を賭して牛と対決し、闘牛士としての意地と誇りを死守しようとするこの老闘牛士に対して、Hemingway は限りない愛情を注いでいることが読者にも伝わってくる。そして、この主人公に対して、彼は「敗れざる男」の称号を与えるのである。これは、後の *The Old Man and the Sea* における Santiago と同質のものである。

II

先の三つの短編に現われた old heroes を更に総合的に、広く、又、深い次元において描き出したのが Anselmo と Santiago である。Baker は *For Whom the Bell Tolls* における Anselmo が、後の Santiago において描き出されている人間像の原形の一つであることを指摘している。⁶⁾ Anselmo に比べると、Santiago はより象徴的な色彩の濃厚な描き方をされている。それだけに、Anselmo は読者に対して、生身の人間としての迫力をもって迫ってくるように思われる。

Anselmo は、背は低いが頑強な体格をもつ 68 才の老人で、橋梁爆破の使命を帯びてやって来た Robert Jordan の道案内をつとめる。'How do we go?' と尋ねる Jordan に対して 'We climb.' と明確に答え、若い Jordan には見分けられないような松林の中を先頭に立って頑丈な足どりで歩いて行く。⁷⁾ この第一章の描写の中に Anselmo の code-hero としての位置づけが明らかにされており、Jordan は、この何の変哲もない老農夫に従って歩を進めるのである。途中老人は、「大丈夫か」と若者を気づかう。この二人の姿の中に、作者の老若に対する一つの視点が示されており興味深いところである。Anselmo には、これまで何回となく登ったこの山腹の地理に対して十分な自信があり、若者も又、この老人の足どりをじっと見守るうちにそれが理解できた。そして、この老人が、信頼するに足る人物であることを悟るので

5) Joseph DeFalco, *The Hero in Hemingway's Short Stories*, Univ. of Pittsburg Press, 1963, p. 121-127.

6) Carlos Baker, *Hemingway: The Writer as Artist*, Princeton Univ. Press, 1963, p. 299. 他の一つとして Baker は *A Farewell to Arms* における若い司祭をあげている。

7) Cf. *For Whom the Bell Tolls*, Jonathan Cape, London, 1954, p. 7.

ある。信頼こそは、一つの使命を果そうとする時に最も大切なものであることをこの若者は十分心得ていた。Anselmo は又、ゲリラの頭目 Pablo にとっても頭の上がらぬ存在であった。この老人にしてみれば、この Pablo も自分の息子のようなものであったのだ。

Hemingway は、この人生における最も確実な現実死であると言ったが、Anselmo も又、この現実をしっかりと把握している人物であった。⁸⁾ そこから彼は、自分を「恐いものなしの老人」であると称し、又、「やると言えば何事でもやりとげる老人」であると言うのである。⁹⁾

最近目立って元気がなくなり、憶病になった Pablo に対して、Anselmo は、「それは金持になったせいだ。」と言う。¹⁰⁾ ここにも人生に対する一つの視点が示されている。貧しさの中に在る人間の方が、より強力な生き方ができると言う人生のパラドックスが示されている。彼にとって、人生とは一生働き続けなければならない場所であった。

I would not kill even a Bishop. I would not kill a proprietor of any kind. I would make them work each day as we have worked in the fields and as we work in the mountains with the timber, all of the rest of their lives. So they would see what man is born to.¹¹⁾

彼にとっては、たとえ敵であっても殺害することは好まず、むしろ、人生の残された道程を死ぬまで働き続けさせることの方が良いと考える。山や畑で、大地を相手に営々と働き続けることによって、人間が一体如何なるものであるかと言うことが分ってくるというのである。この労働を尊ぶ古典的な精神、大地との結びつきの中に人間の位置を見定めようとする姿勢は、同時に Hemingway の primitivism につながるものであると言えよう。

Anselmo は又、狩猟の好きな老人である。しかしながら、戦いになって人間を殺戮しなければならないことに対しては深い悩みを抱いている。けれども、現実の世界は、Anselmo の願いとは反対に人間を殺戮の場へと送り込んでいるのである。たとえ相手が憎むべきファシストであっても、これを殺すことには反対する Anselmo である。

It is only orders that come between us. Those men are not fascists. I call them so, but they are not. They are poor men as we are. They should never be fighting against us, and I do not like to think of the killing.¹²⁾

彼にとっては、現時点においては相対立する位置にはあるが、ファシストとして自分達と同じ貧しい人々なのである。彼等にしても、好きで人殺しをしている訳ではあるまい。従ってこのような無益な殺し合いは止めなければならないと考えるのである。彼は、人間が真に謙虚になって大地と親しみ、額に汗して土を耕し、木を伐り、水を汲みして働くようになれば、今とは違った世界ができることを確信している。

That we should shoot none. Not even the leaders. That they should be reformed by work.¹³⁾

けれども、このような考え方は、残念ながら現実においては 'very rare idea' なのである。¹⁴⁾

相互に血を流し合わねばならない人間社会の事を考えていると、いつしか神の問題が Anselmo の脳裏に浮んで来る。この世に神が存在するならば、自分がこれまでに目撃してきたような酷いことをどうして許しておくだろうか、と神の存在に対して深い疑惑を示しつつも、誰かが人間の罪を許してくれなければならない、と心の底では感じている。彼の最大の悩みは、信心の中で育っているながら神が明瞭に見えないと言う焦燥感であっ

8) Cf. Ibid., p. 18.

9) Cf. Ibid., p. 19.

10) Cf. Ibid., p. 29.

11) Ibid., p. 43.

12) Ibid., p. 186.

13) Ibid., p. 271.

14) Ibid., p. 43.

た。

彼は善人であったため、いつでも長時間一人でいる時には、殺人と贖罪の問題を考えていたのである。戦争が終結したら、何らかの形で公の贖罪行為が行われなければならないことを、彼は真剣に考えていた。そうしなければ、人間が永久に生きる為の真実の人道的な基礎がなくなると感じていたからである。¹⁵⁾しかしながら、妻子もいなくなった孤独なこの老人にとって、このような大きな問題に対して一体何ができると言うのであろうか。彼に可能なことと言えば、与えられた場において最善を尽すという以外にはなかったのである。実際、彼の唯一の誇りは、これまで彼が自分に与えられた使命に忠実であったと言うことであった。

But one thing I have that no man nor any God can take from me and that is that I have worked hard for the good that we will all share later. I have worked my best from the first of the movement and I have done nothing that I am ashamed of.¹⁶⁾

これに対して、'All that I am sorry for is the killing.'¹⁷⁾と云い、彼の唯一の苦悩が殺人の問題であることを述懐する。更に、'In those who like it there is always a rottenness.'¹⁸⁾と、殺戮を好む人間を呪うのである。彼は、この人生を一つの戦いの場として把握している。我々が安住の地に到達するまでに、先づ、人生における戦いに勝たなければならないと考える。

But you have no house now, he thought.

We must win this war before you can ever return to your house.¹⁹⁾

しかしながら、Anselmo は、戦いに勝つと言うことと殺すこととは別だと考えている。'That we should win this war and shoot nobody.'²⁰⁾と云うのである。この点に彼の深い悩みがあったの

である。人間のいとなみの中に本質的に内在するこの矛盾に深く心を悩ませつつ、尚、与えられた使命を忠実に果すことにおいて人間の誇りを保持しようとする彼の人生態度は、Hemingway の価値観の基盤をなすものである。

Anselmo は、この運動に参加する前はよく祈った。祈ることによって救われた気持になっていたのである。けれども、運動に入ってから一度も祈っていない。それは、自分だけ特別な優遇を望むと言うようなことはしたくなかったからであった。²¹⁾しかしながら、橋梁爆破がいよいよ明日に迫った夜、彼はこの運動に入って初めて祈るのである。'Help me, O Lord, to comport myself as a man to-morrow in the day of battle.'²²⁾と云う彼の祈りは、戦きの当日男らしく立派に振舞えるようにと言う点に絞られていた。そして祈ったことにより、明日への自信が湧いてくるのを感じるのである。哨所を先づ襲撃した時、Jordan は Anselmo の白い短い鬚の生えた両頬に涙が流れ落ちるのを見た。橋梁爆破をいよいよ目前にひかえて Anselmo の覚悟は十分にできていた。

But there was no excitement. It was all calm now and the sun beat down on his neck and on his shoulders as he crouched and as he looked up he saw the high, cloudless sky and the slope of the mountain rising beyond the river and he was not happy but he was neither lonely nor afraid.²³⁾

すべてが静寂につつまれ、雲一つない青空は Anselmo の心境を象徴的に表わしている。彼は幸福ではなかったが、淋しくも、又、恐ろしくもなかった。

橋梁の爆破と同時に Anselmo の体も吹っとなった。彼は立派にその使命を果したのである。Jordan は Anselmo の死を確認した。死体になった Anselmo は馬鹿に小さく見えた。Jordan は

15) Cf. Ibid., p. 190.

16) Ibid., p. 191.

17), 18) Ibid., p. 191.

19) Ibid., p. 187.

20) Ibid., p. 271.

21) Cf. Ibid., p. 190.

22) Ibid., p. 309.

23) Ibid., p. 415.

その時、こんなに小さな老人の何処にあれだけの力があつたのか不思議に思った。そして、彼の道案内であつたこの老人の死に際して、彼の全身には失望と共に憤りと憎悪と空虚感が駆け巡つたのである。あれだけ戦争を憎み、人間の殺戮を憎んだ Anselmo も、その戦争の犠牲となつて世を去つた。

Baker は、'Of the native Spaniards in the book, none better exemplified the right human norm than Anselmo, Jordan's sixty-eight-year-old guide and friend.'²⁴⁾と記し、更に Anselmo の重要な役割は、*King Lear* における Kent と同様、人間の価値の標準を示す尺度としての役割を果たすことであるとしている。²⁵⁾ 'With Anselmo as a norm, the tragedy of Spain shows all the darker.'²⁶⁾と言われる如く、Anselmo の存在によって、この作品が一層深みのあるものになっていることは否めない事実である。彼の存在は、Hovey も 'Anselmo's reliable presence always does good to Jordans' heart.'²⁷⁾と記している如く、若き Jordan にとって文字通り精神的支柱となっているのである。

III

The Old Man and the Sea における Santiago は、これまでの code-hero が備えていたあらゆる特性を凝縮して作り上げたような人物であり、それ故に、Anselmo 等と比べて象徴的な色彩が強く、この作品に神話的叙事詩の如き性格を与えることになっている。DeFalco が、'Old Man at the Bridge' における老人に対して、キリストのイメージを見出し、全体をこの観点から論じている如く、²⁸⁾ Santiago に関しても同様の symbolism が見出される。Santiago という名前そのものがキリストの十二弟子の一人であるヤコ

ブのスペイン名であると言われているし、又、Melvin Backman は、この老人の中には闘牛士と、十字架の苦難にあわれたキリストのイメージが融合されて一つの象徴的な人間像を形作っていることを指摘している。²⁹⁾

この老漁夫が、身よりのない孤独な老人として描かれているのも、Anselmo やその他の Old hero 達と同様である。又、少年 Manolin に対する Santiago の関係も、Robert Jordan と Anselmo の関係と著しく類似している。少年にとって、Santiago は友であると同時に人生の師であつた。更に、巨大な魚を引っかけて魚と自分の関係について種々思いめぐらし、人間の罪の問題にまで思考を拡大して行くのも Anselmo の苦悩と共通のものである。

様々な不条理にもかかわらず、人間はその与えられた使命に忠実でなければならないと言う人生観も、これ又、Anselmo の中に描き出されているものと平行線をもつものである。更には又、すべての艱難を克服し、報われることのない人生の戦いに雄しく挑んで行く heroic な人生態度、そして、敗れざる者として人間を高揚する点についても、先述の Mannel や Anselmo の中に描かれたものと同質のものである。しかしながら、幾人かの Old heroes の中で、最も強烈に描かれ、読者の脳裏に強く焼きつけられているのは Santiago であることも否めない事実である。

IV

Hemingway における Old hero 達が共通に備えている性格の一つは、'dignity' という点である。それは唯単に、外見的な要素からくるものではなく、長い人生を自分の使命に忠実に、しかも黙々と歩んで来た人々にのみ見られる内面的な徳目である。'A Clean, Well-Lighted Place' の老人

24) Hemingway: *The Writer as Artist*, p. 243.

25) Cf. *Ibid.*, p. 244.

26) *Ibid.*, p. 244.

27) Richard B. Hovey, *Hemingway: The Inward Terrain*, U. of Washington Press, Seattle and London, 1968, P. 163.

28) 本稿注 5) 参照

29) Cf. Hemingway: *The Writer as Artist*, p. 293.

のような、既にこの世においては何ら活動の余地がないように思われる者の中にも、燻し銀のような輝きをもって存在するようなものである。Manuel にしても、Anselmo にしても、更には Santiago にしても、或る意味において、人間の具備する気高さと威厳の象徴と言えるであろう。そして、この徳性は、Hemingway が追求した 'How to live' のテーマにおいて最も重要な位置を占めるものの一つであると言って良い。その意味で、'Today is Friday' に表わされている十字架上のイエスは、Hemingway の code-hero としての役割を十分に果していると言えよう。

この 'dignity' の問題に関して、Rovit は、20 世紀の奇妙な問題の一つは、文学において人間の尊厳 (human dignity) を表現することが、むしろ異常のように考えられていることであると指摘している。そして更に、

The greatest majority of modern heroes in literature are purposely grotesque—picaresque saints, rebels, victims, and underground men of all shapes and colors . . .

Hemingway's attempt to retain the ideal of dignity without falsifying the ignobility of the modern human condition is one of his signal triumphs as a modern writer.³⁰⁾

と述べて、Hemingway がその作品の中で human dignity を追求したことを高く評価している。そして Hemingway は、この human dignity を、code-hero を通して飽くことなく描こうとして来たのであった。

第二の共通点は、孤独であることである。これは、かならずしも老人達にのみ限られたことではなく、若い主人公達も、大勢の仲間の中に囲まれて一見孤独とは無縁なように見えるが、結局、皆孤独な人間として描かれている。Jake Barnes も、Frederick Henry も、更には Robert Jordan も皆孤独であった。しかしながら、老人において、人生のしみじみとした孤独感が最もよく表われる

のである。先述の Old hero 達は、皆例外なく身寄りのない一人ぼっちであり、それ故に一層人生の哀感が読者に伝わってくるのである。

第三の共通点は、これらの老人達がすべてアメリカ以外、つまりスペイン人であるということである。³¹⁾ Hemingway とスペインとは、切っても切れない縁があることは周知の事実である。彼は、生前幾度となくこの国へ渡った。彼が何故スペインと言う土地と、そこに住む人々を斯くも愛したかと言う点に関して、Benson の次の論評が最もよく表現していると思われるのでここに引用する。

For it is in the Spanish people that Hemingway found so many traits that contradict our emotions and attitudes as Anglo-Americans, particularly in regard to the "simplest things," such as death, love, and violence. We think of the Spanish and the Spanish-American as closely connected to the earth and the elements, to the basic functions of life, and to ritual and primitive thought process (animism and superstition). Hemingway found in the Spanish the ability to regard nature with affection without sentimentality. He also found in the Spanish the ability, demonstrated by Santiago and also by Anselmo in *For Whom the Bell Tolls*, to have pride and dignity, and at the same time have humility.³²⁾

Baker が、'His fundamental program was simplicity itself.'³³⁾ と述べている如く、Hemingway の関心は、飾らない素朴な生活を送ることにあった。丁度 D.H. Lawrence が、文明社会を嫌って、Spanish-America と呼ばれる New Mexico や Arizona のインディアン達の中に原始的な魅力を感じ、この土地を度々訪れたように、³⁴⁾ Hemingway も又、スペインの素朴な土地と人々に魅せられたのである。

30) Ernest Hemingway, p. 64.

31) Santiago も広い意味でこの範疇に入る。

32) Jackson J. Benson, *Hemingway: The Writer's Art of Self-Defense*, U. of Minnesota Press, Minneapolis, 1969, p. 185n.

33) Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story*, Scribner's. New York, 1969, p. 185.

34) 拙稿「D. H. Lawrence と Spanish America」(関西学院大学「社会学部紀要」第18号昭和44. 3) 参照

For Whom the Bell Tolls において、Agustin は、人を殺したくて堪らない気持は、さかりのついた牝馬のように自分をかっさせると言い、そして、その気持は味わった者でなければ分らないと Jordan に言う。Jordan はこれを聞いて、スペイン人の血の中に流れている異質的な、しかも、原始的な特性を、或る種の畏敬の念をもって感じるのである。³⁵⁾

共通点の最後は、これらの Old hero 達が、Hemingway の最も高揚する Stoicism の象徴であると言うことである。‘The Undefeated’ における Manuel は、屈辱的な扱いを受けながらも、闘牛士としての意地を捨てず、誇りと威厳とをもって命を賭ける。それは又、Santiago が釣り上げた巨大な魚を鯨から守ろうとして必死に空しい闘争に命を賭けるのに似ている。闘争の終わったあと Manuel も Santiago も非常に疲労感を覚える。‘Old Man at the Bridge’ の老人にしても同様である。戦火の中で空しいとは知りながら、最後の瞬間まで自分の土地に留まり家畜の世話をする。‘A Clean, Well-Lighted Place’ の老人も、残された人生を黙々と生命のある限り歩き続けるのである。

Hemingway の描く主人公達は、決して超人的な人物ではなく、むしろ、破れかぶれの人間であり、その打ちひしがれた中に、耐え忍ぶことによって僅かな人間の尊厳を全うしようとしている人々である。

V

以上の如く、Hemingway が、彼の human norm の具現者として多くの場合老人を選び、最終的には、code-hero 中の hero として Santiago という貧しい老漁夫を起用したということは非常に興味深いところである。何故に code-hero として老人が起用されるのであろうか。年輩の者が、未経験な若年の者の手本となるということは、洋

の東西を問わず伝統的に行われて来たところである。しかしながら、Hemingway の如き作家が、老人を起用するについて、唯漠然と従来の慣習に従ったとは考えられない。それでは一体、彼の human norm の具現者として老人が起用されなければならない必然性とは如何なるものであろうか。

Robert W. Lewis, Jr. は、彼の *Hemingway on Love* の中で、この問題に示唆を与える論評を行っている。彼は、この論評の中で、Hemingway の作品において扱われている愛の問題を、‘love ethic’ の面から分析して行こうとしている。彼はそれを、作中人物の生活における愛と、愛の役割が、次第にエロスのなものからアガペー的なものへと昇華して行く過程においてとらえようとしている。

My conclusion is that Hemingway's concept of love and its role in the lives of his characters gradually changed and matured from a negativistic disillusionment with romantic love to an acceptance of agape or brotherly love.³⁶⁾

彼は、Freud の、‘Civilization is the fruit of renunciation of instinctual satisfaction, and from each new-comer in turn it exacts the same renunciation.’³⁷⁾ とする言葉を引用し、真に人間が高められ、開化される為には、人間がすべての ego を放棄しなければならないことを述べている。つまり、エロスの領域を脱脚しなければならないと言うのである。しかしながら、現実には人間の egoism は容易に克服できるものではなく、従って、世の中には、‘civilized hypocrite’の方が真に開化された人間、即ち、‘civilized person’よりはるかに多いわけである。

更に彼は、‘Since art is one of the marks of civilization, it is perfectly fitting that agape is essential to a writing technique.’³⁸⁾ と論をすすめる。つまり芸術というものが、真に開化され高度に発達した人間社会のしるしであるならば、そ

35) *For Whom the Bell Tolls*, p. 272.

36) Robert W. Lewis, Jr., *Hemingway on Love*, U. of Texas Press, Austin and London, 1965, p. vii.

37) *Ibid.*, p. 11.

38) *Ibid.*, p. 11

の根底には agape が中心として存在しなければならぬ。何故ならば、真に開化された高度な文明となれば、人間の ego が克服されて初めて生まれるものであるからである。

Hemingway は、弟の Leicester が作家志望であることを知り、ある日釣の帰途この問題について長い語り合いをし、弟に忠告を与える。いくつか先輩作家として忠告した中に、

Anyway, forget about yourself and try to get inside other people more and to see things from their point of view,³⁹⁾

と述べ、自己中心的な人間の多い世の中で、特に作家は、自分を殺さなければならないことを強調している事実は、Freud の説と考え合わせて興味深いところである。

この様に考えてみると、‘the most civilized person’ というのは、ego を棄て、他人に対する配慮に生きる愛の人でなければならない。しかしながら、現実には ego を放棄することが人間にとって可能であろうか。人間の内面が織りなす複雑なあや、ego を中心とするエロスに起因する。けれども老人は、Lewis が、‘The burden of eros no longer troubles the old man as it does Jordan and Pablo.’ と Anselmo について述べているごとく、エロスの世界をすでに脱脚した存在なのである。高齢の老人は、自然に libido が消滅している。従って、愛欲の問題に悩まされることもない。勿論、愛欲の問題から解放されたと言うことが、かならずしも直ちに ego を脱脚したと言うことにつながるものではないが、これまでの context から考えて、老人は ego を放棄した人間として扱い易い器である。Hemingway の如き artist が、この老人の備えている属性を見逃す筈はない。ここに、code-hero として老人が起用される一つの必然性があるように思われる。

Hemingway は、老人の枯れた肉体的条件を、人間の内面を象徴するものとして用いたのである。従って、先述の老人達は皆、すでに妻子もなく一人ぼっちであり、この世の憂いを超越した人間として描かれている。code-hero として、孤独であるということは、必要条件でなければならぬ

い。そして、世俗の問題から脱脚しているが故に simple であり得るのである。彼等に課せられた事は、唯ひたすら、Hemingway の掲げる徳目を追求することだけなのである。このように考えてくると、code-hero として老人が活躍する必然性が理解でき、ここにも Hemingway の artist としての面目躍如たるものがあると感じざるを得ない。

更に、今一つ、Hemingway が老人を code-hero として起用した理由として考えられる点に、彼自身と祖父達の関係があることを見逃すわけにはいかない。Hemingway が生まれた時、父方、母方、両方、の祖父達は健在であった。父方の祖父は、Anson Tyler Hemingway であり、母方の祖父は、Ernest Hall であった。

Hemingway は、幼少の頃からこの二人に大きな影響を受けたと考えられる。Ernest Hall は、Hemingway の幼少期に同じ家に住み、種々の薫陶を彼に与えた。又、Anson T. Hemingway は貧しさの中にも厳しく敬虔な清教徒気質の持主であり、南北戦争に参加した古武士の人物であった。彼は戦争当時の話をよく孫達に語って聞かせ、Hemingway が10才の時には猟銃を誕生日のプレゼントとして贈ったりもした。祖父達は二人とも威厳のある風貌の持主でもあった。

Hemingway は、自分の祖父のことを作品の中に記している。For Whom the Bell Tolls において、Jordan は、いよいよ作戦を実行に移す前夜、お祖父さんのことを思い出す。丁度、Anselmo が、この運動に参加して初めて祈りを捧げた同じ夜である。お祖父さんから聞いた南北戦争の話、インディアンの話、又、彼が所有していたピストルや、サーベルのこと等々、次から次へと思い出して行く。Jordan は、お祖父さんだったら今自分が立たされているこの状況を、どう判断するであろうかと考える。何故ならば、お祖父さんは、優秀な軍人であったからである。彼の祖父に対する思慕は、異常なまでに高まり、‘I wish Grandfather were here instead of me,’⁴⁰⁾ と、何度も繰返すのである。Jordan にとっては、祖父は勇氣と決断の象徴のように思われたのであ

39) Leicester Hemingway, *My Brother, Ernest Hemingway*, The World Publishing Co., Cleveland, 1962, p. 156.

40) *For Whom the Bell Tolls*, p. 310,

る。南北戦争で雄名を馳せた Custer 将軍を凌ぐ素晴らしい軍人であったと誰もが言う祖父に対する思いは、次から次へと果しなく広がって行くのである。

ここにおいて我々は、風雪に耐え、長い人生を生き抜いて来た者への敬意の念を、Hemingway は幼少の頃からすでに祖父を通じて植えつけられていたと理解できる。それは Jordan が Anselmo に対して、又、Manolin が Santiago に対して示す敬意と愛情の原形となっているのかも知れない。

Code-hero としての老人の必然性については他にも種々な議論があるであろう。しかしながら、老人が若者に、経験者が未経験者に、というこのパターンは、人間の最も原始的なパターンではあるまいか。土地を耕し、山に入って木を伐るという基本的な作業の過程において、人生の意味が理解できるようになると言った Anselmo の言葉が

大きな意味をもって読者に伝わってくる。⁴¹⁾土を耕すにも、木を伐り出すにも、古老の忠告は最も大切なものとして受けとらなければならない性質のものである。それは、多くの年輪を重ねて初めて体得し得る人生の智恵だからである。artist として Hemingway が示す小説的技巧の問題とは別に、彼自身が、この原始的な価値の伝達方式を好んでいたのかも知れない。彼をしてスペインの土と人とを愛せしめ、又、アフリカの自然を愛せしめたものが、原始への憧憬であったとするならば、この最も原始的な価値の伝達方式は、彼の理想であったとも言えるであろう。それは又、同時に、北 Michigan における Walloon Lake の自然の中で、父親が子供達に水泳を教え、小鳥の鳴き声の聞き分け方を教え、更に、釣と狩猟と乗馬の手ほどきをしてくれたあの懐かしい教育のパターンでもあるからである。

41) 本稿注11) 参照